

洗淨用の水をめぐる法学説とハディースについて

Observations of Legal Opinions and Hadiths Related to the Matter of Water Used for Ablution

柳 橋 博 之

Hiroyuki YANAGIHASHI

Abstract This study seeks to clarify the origin of the statement attributed to the Prophet Muḥammad that “Water does not become impure if it reaches two *qullas*” and the process of formation and development of hadith clusters that include this statement. A hadith narrated by ʿĀ'isha, a beloved wife of the Prophet, suggests that this statement meant originally that leftover water that has been used by a sexually impure person (*junub*) for ablution can be used by another person for ablution if it reaches “two *qullas*,” that is, about 6 kg. Then, as the rule was established that such water is pure and can be used for ablution regardless of its amount, this statement was put in circulation as an independent hadith. Subsequently, this statement was combined with two hadith clusters. First, Muḥammad b. Ishāq (d. 151/769) and al-Walid b. Kathīr (d. 151/768–9), who were born in Medina and moved to Iraq, combined this statement with the hadiths known in Medina, according to which the Prophet or ʿUmar b. al-Khaṭṭāb declared it lawful to drink from a watering place visited by predatory beasts and dogs. They seem to have been inspired by the idea generally accepted in Iraq that a small amount of water becomes impure if touched by an impure object whether it looks pure or impure. Second, the Basran traditionist Ḥammād b. Salama (d. 167/784) combined this statement with the hadith put in circulation in Basra, which reads that the Prophet stated that “Nothing renders water impure” when he saw his companions hesitate to drink from a pond in which carcasses had been thrown. Ḥammād seems to have been inspired by the same idea as Muḥammad b. Ishāq and al-Walid b. Kathīr. In this process, a *qulla* was redefined so that it became equal to around 196 kg, that is, thirty times the size of the (smaller) *qulla* according to its original definition.

Keywords Hadith (ハディース), Ablution (洗淨), Prayer (礼拝), Sexually impure person (性的に不浄な者), Traditionist (伝承家)

はじめに

イスラームの教義において、信徒がかならず果たさなければならない5つの義務が5柱として定められている。そのなかで信仰告白に次いで第2の柱とされているのが一日5回の礼

拝である。信徒は、礼拝に先立って身を清めなければならない。クルアーン第5章第6節には次のように説かれている。

信ずる人々よ、おまえたちが礼拝に立つときには、顔を洗い、肘まで手を洗い、頭を拭い、くるぶしのところまで足を洗え。おまえたちが身の穢れの状態にあるならば (wa-in kuntum junuban), とくに身を浄めよ。

この一節を一つの根拠として、汚れた状態と、それに対応して清めの方法には、それぞれ2種類が区別される。まず、汚れた状態には、小汚 (ḥadath, ḥadath aṣghar) と大汚 (ḥadath akbar, junub) が区別される。小汚とは、排泄をしたり性器に触れたりすることにより起こる汚れた状態である。この状態を清めるためには、部分洗浄 (wuḍū), すなわち身体の一部を洗い清めることが必要とされる。引用文の第1文がこれに対応する。これにたいして大汚とは、性交したり月経を迎えたりすることにより起こる汚れた状態である。この状態を清めるためには、全身洗浄 (ghuṣl), すなわち全身を洗い清めることが必要とされる。引用文の第2文がこれに相当する。

洗浄は、原則として清浄な真水 (浄水) をもって行われなければならない。いうまでもなく、ここで浄水とは、化学的な意味で不純物を含まない水という意味ではなく、礼拝を有効に行うために洗浄に用いることのできる水という意味である。そのような水が備えるべき要件は2つある。第1に、混合や化学的变化により変質していないことである。第2の要件は不浄物 (najās) との接触に関わる。不浄物には、血、排泄物、吐瀉物、一部の動物の死体、犬や豚やその身体の一部などが含まれる。これらの不浄物に接触していない水を礼拝に用いることができる点については異論がない。問題は、不浄物に接触した水である。

この点に関しては、法学派の間に学説の対立が見られる。ハナフィー派は、その量の大小にかかわらず、不浄物に触れた水を不浄として、これを洗浄に用いることはできないとする [Jaṣṣāṣ 1412/1992: 1: 115; Marghīnānī n.d.: 1: 18]。マーリク派については、イブン・ルシュド・アル=ジャッド (ヒジュラ暦 520/西暦 1126 没) が次のように述べている。

清浄でもないし浄化作用もない水とは、そこに溶け込んだ不浄物によりその属性の一部が変化したものである。もしそこに溶け込んだ不浄物によってその属性がまったく変わらないならば、水の法的な性質も変わらない。それは、水の量が多いか少ないかにかかわらず、これがマーリクの正統な学説の原則であり、メディナの弟子たちが彼から伝えるところでもある。しかし、エジプトの弟子たちは、水が少量ならば、不浄物は [その法的性質を] 変えると伝えるし、この学説を採る者も多い [Ibn Ruṣṣd al-Jadd 1408/1988: 1: 86; cf. Ṣaḥnūn n.d.: 1: 25-26]。

後に述べるように、メディナの古い学説は、水を観察して、その属性に変化が見られなければ、これを浄水とみなしていた。水の量によって法的な性質が変わるとする学説は、後に導入され、マーリクの一方の学説となったようである。

シャーフィイー派は、水の量を区別して、次のように説いている。すなわち、水の量が2

クツラ (qulla) よりも少ない場合、水の属性に変化が見られるか否かを問わず、不浄物に接触した水は不浄であり、洗淨に用いることはできない。水の量が2クツラ以上の場合、水の属性に変化が見られるならば水は不浄とされるが、その属性に変化が見られないならば水は清浄でありこれを洗淨に用いることができる [Māwardī 1414/1994: 1: 343; Juwaynī 1430/2009: 1: 261; Nawawī 1405/1985: 1: 19-20.]。

ハンバル派については、カルワザーニーは、シャーフィイー派と同じ学説を唱えている [Kalwadhānī 1423/2002: 1: 9]。イブン・クダーマは次のように述べている。水の属性に変化が見られた場合には水が不浄とされる点に関しては異論がない。水の属性に変化が見られない場合については、イブン・ハンバルからは2つの学説が伝えられている。その一方によれば、水の量が2クツラまたはそれ以上ならば水は清浄であるが、2クツラに達しないならば不浄である [Ibn Qudāma 1405/1985: 1: 7-8; cf. 中田 2003: 274, 276]。

それでは2クツラとはどれほどの量に当たるのか。この点に関しては、幾つかの説が唱えられている。シャーフィイー派の法学者ナワウィーによれば、バグダード・ラトル (ratl) に換算した場合、これを500ラトルとする説、600ラトルとする説、それに1000ラトルとする説が存在するが、最初の説が適当である [Nawawī 1405/1985: 1: 19; cf. Māwardī 1414/1994: 1: 335]。1バグダード・ラトルは382.5グラムに相当するので、500ラトルならば196キログラムほどになる。イブン・クダーマは、イラク・ラトルで400ラトルとする説と、500ラトルとする説に言及している [Ibn Qudāma 1405/1985: 1: 8]。ただしこれは、早くとも9世紀後半以降に唱えられた説であり、後に見るように、それ以前にはこれよりもはるかに少量の水を指すとする解釈が存在した。

この2クツラという数字は、ハディースに由来する。すなわち、預言者は、「水が2クツラある場合、何もこれを不浄にしない (idhā kāna al-mā' qullatayn, lam yunajjisū-hu shay)」あるいは「水が2クツラある場合、水は穢れを含まない (idhā kāna al-mā' qullatayn, lam yaḥmil al-khabath)」,あるいはこれらと同義のことを述べたと伝えられる [Ibn Māja n.d.: 1: 172, no. 517; Abū Dāwūd n.d.: 1: 17, no. 63; Nasā'ī 1441/1991: 1: 74, no. 50]。シャーフィイー派と、ハンバル派の一方の学説は、これらのハディースを論拠として、水の量が2クツラに達しているか否かで扱いを異にしている。

しかしここで疑問が生ずる。水に接触してこれを不浄にする物、つまり不浄物には様々な物が含まれ、またその大きさも様々である。たとえば、ネズミの死体は数十グラムであろうが、象の死体は何トンにもなる。なぜ水の量だけが問題になるのだろうか。確かに、シャーフィイー派もハンバル派も、水が2クツラを超えるという条件に加えて、水が変質していないという条件が満たされてはじめて水を清浄だとしているので、実践上の問題はほとんどないのかもしれない。実際に、上に見たように、マーリク派の一方の説は、この条件だけを設定している。しかしそれで実践上の不都合がないとすると、逆に、水が2クツラ以上なければならぬという条件にはどのような意味があるのかという疑問が生ずる。さらに、ハ

ディースの文言にまつわる問題として、大部分のハディースにおいて預言者の言葉は上で引用した文言にとどまる。僅かに、バイハキーの『スナン』に収録されたあるハディースによれば、預言者は、「水が2クツラある場合、何もこれを不浄にしない。ただし、その匂いまたは味を変質させてしまうものは別である」と言っている [Bayhaqī n.d. 1: 259, no. 1158]。しかし、このようなただし書きを含むハディースはこれ以外にはない。シャーフイイー派と、ハンバル派の一方の学説は、このようなただし書きを含まないハディースをこのただし書きを補って解釈しているが、この解釈は正しいのだろうかという疑問も生ずる。

管見の限り、2クツラという量が元々どのような意味を持っていたのかに関する考察はまだなされていない。洗浄用の水に関しては、マゲンが、ハディースも引用しつつ、詳しい分析を行っているが、ここでも2クツラという制限についての考察は行っていない [Maghen 1999]。本稿では、上掲の預言者の言葉を含む（その一部はこの言葉からのみなる）ハディースの形成過程を考察することを通して、2クツラという数値の意味とその由縁を明らかにする。

I クツラとはどれほどの量なのか

先に、クツラについては、これを少量の水を指すとする解釈が存在していたと述べた。ここでは、クツラという単位をもう少し詳しく考察してみよう。そこで最初に、クツラについての説明を含む初期の記述として、シャーフイイーの高弟ムザニー（エジプト、264/877-8没）の『提要』の一節を訳出しておこう。

（シャーフイイーは言った）「信頼できる者←ワリード・ブン・カスィール・アル=マフズーミー←ムハンマド・ブン・アッバード・ブン・ジャアファル←アブドッラー・ブン・アブドッラー・ブン・ウマル←その父という伝達履歴で伝えられるところ、預言者は『水が2クツラある場合、水は穢れ (al-khabath) を含まない』と言った。あるいは『不浄 (al-najas) を含まない』と言ったかもしれない」。また、シャーフイイーによれば、イブン・ジュライジュは—シャーフイイーはその伝達履歴に触れなかったが—預言者が次のように語ったと言った。すなわち預言者は、「水が2クツラある場合、水は穢れを含まない」と言った。彼はこのハディースについて、「ハジャルのキラール (qilal Hajar) で」と言った。イブン・ジュライジュは、「私はハジャルのキラールを見たが、1クツラは2キルバ (qirba) または2キルバ強に達する」と言った。（シャーフイイーは言った）「2クツラは5キルバと見ておくのが無難だ。」（彼は言った）「ヒジャーズのキルバは大きい。」彼は、次のような論拠を挙げている。すなわち、ある人が預言者に「神の使徒よ、あなたはブダーア (Budā'a) の井戸の水を使って部分洗浄を行っていますが、そこには月経の血の付いた布や犬の肉や人々を汚す物が投げ込まれました」。すると預言者は「水は何もこれを不浄にしない (al-mā' lā yunajjisuhu shay) 」と言った。

シャーフィイーは言った、「『水は何もこれを不浄にしない』の意味は、それが多い時には不浄がそれを変質させないということである」[Muzanī 1419/1998: 9]¹⁾。

この引用文について幾つか注意しておこう。第1に、イブン・ジュライジュ（メッカの伝承家、150/767-8 没）の言葉として、「私はハジャルのキラールを見た」とされているが、ハジャルとは、アラビア半島南西部の都市の名である。キラールはクッラの複数形であるが、バスラの伝承家フシャイム（183/799 没）は、「2つのクッラとは2つの大きな壺 (al-jurratayn al-kabiratayn) を指す」と述べたと伝えられる [Dāraqūṭnī 1403/1982: 1: 19-20, no. 14]。第2に、キルバとは、ヤギやヒツジの内臓を取り出して作った革袋を指す。第3に、ブダーアの井戸とは、メディナにあった井戸を指す。

この引用文には解釈上の問題がある。引用文中で「1クッラは2キルバまたは2キルバ強に達する」と訳した一文（イブン・ジュライジュの言葉）は、原文では「القلة تسع قريبتين أو قريبتين وشينا」となっている。これとまったく同じ一文がシャーフィイーの『ムスナド』にも収録されているが、この著作に対するラーフィイーの注釈書の校訂本において、校訂者のアブー・バクル・ワール・ムハンマド・バクル・ザフランーンはこれを「al-qulla tasa'u qirbatayn aw qirbatayn wa-shay」と読んでいる [Rāfi'i 1428/2007: 3: 58]。私は、上掲の引用文ではこの読み方に従って訳した。しかし、この読み方が誤っている、ないしはこれとは異なる読み方が存在したことを示唆する記述が2つある。

(1) シャーフィイーは、『ウンム』において、「ムスリムは、これ（2クッラ）は1/2キルバより小さいかこれに等しいと信じていた。その後で彼は『5キルバが2クッラの上限である。しかし2クッラは5キルバよりも小さいかもしれない』と言った」と述べている [Shāfi'i 1393/1973: 1: 4-5]。この「ムスリム」とは、メッカの伝承家ムスリム・ブン・ハーリド（179/795-6 没）を指す。つまり、ムスリムは、最初はクッラを小さい量だと考えていたが、後になってそれよりも10倍程度大きい量だと考えるに至ったことになる。そうだとすれば、ムスリムよりさらに一世代前のイブン・ジュライジュの言葉も、母音の付け方を変えて、「1クッラは2/9キルバまたは2/9キルバ強に当たる (al-qulla tus' qirbatayn aw qirbatayn wa-shay)」と読むことができそうである。

(2) イエメンの伝承家サンアーニー（211/827 没）は、2クッラは1ファラクに等しいと述べている [Ṣan'ānī 1403/1983: 1: 79, no. 259]。他方、アブー・ダーウードは、イブン・ハンバルが1ファラクは16ラトルに等しいと言うのを聞いたと記している [Abū Dāwūd n.d. 1: 62, no. 238; cf. Bayhaqī n.d. 1: 263, no. 1173]。これによれば、2クッラは、約6キログラム、つまりシャーフィイー派やハンバル派の理解による体積の約1/30になる。

もう一つ加えるならば、上に述べたように、フシャイムは、クッラとは大きな壺を指すと

1) 引用文中、「彼」が誰を指すのが明確でない箇所が幾つかあるが、刊本に従ってあえて特定しなかった。

述べている。しかし、後世のシャーフイイー派やハンバル派の理解に従って1クツラが100キログラム近くあるとすれば、壺としては大きすぎるように思われる。ここから、1クツラの元の量は不明であるが、8世紀の半ば前後になって、その10ないし30倍に相当する100キログラムないし100リットルを超える大きな量として再定義されたと思われる。すると、2つの疑問が浮かんでくる。第1に、なぜクツラの定義が変わったのか。第2に、元々2クツラという量はどのような意味を持っていたのか。次節以下では、2/8世紀の法学者ないし伝承家の学説を検討することによりこの2つの疑問に答えてみたい。

II 2クツラか40クツラか

すでに述べたように、預言者は、水が2クツラあれば、それは不浄にならないと述べている。ところが、教友や後継世代のなかには、2クツラではなく、40クツラという数字を与えている者もいる。すなわち、メディナの法学者にして伝承家ムハンマド・ブン・アル＝ムンカディル（130/747-8没）は、40クツラの水があればそれは不浄にならないと説いた [Ibn Abi Shayba 1427/2006: 2: 141, no. 1543; Dāraqūṭnī 1403/1982: 1: 27, no. 39]。彼はこの学説を、やはりメディナの伝承家アブドッラー・ブン・アムル（62/602-3没）にも帰せしめている [Ibn Abi Shayba 1427/2006: 2: 139, no. 1535; Dāraqūṭnī 1403/1982: 1: 27, nos. 35-37]。また、ダーラクトゥニーが収録している伝承によれば、教友アブー・フライラは「40クツラの水があれば、それは汚れを含まない」と言った。この伝承に対する注釈のなかで、ダーラクトゥニーは、アブー・フライラは、40クツラではなく40ガラブ (gharab) と行ったとする説や、40ダルウ (dalw. 釣瓶) と行ったとする説もあると述べている [Dāraqūṭnī 1403/1982: 1: 27, no. 40]。

ここで注目すべきは40ダルウという量である。というのは、2/8世紀に活躍した法学者ないし伝承家のなかに、井戸に動物が落ちた時に、水を浄化するために汲み出さなければならない水の量としてこの数字を挙げている者がいるからである。たとえば、メッカの伝承家にして法学者アター・ブン・アビー・ラバーフ（114/732-3没）は、次のように説いている。大きなネズミが井戸に落ちた場合は20ダルウを汲み出さなければならないが、さらにそれが死んだ場合は40ダルウを汲み出さなければならない。ヒツジが井戸に落ちた場合は40ダルウを汲み出さなければならないが、さらにそれが死んだ場合は井戸の水をすべて汲み出さなければならない [Ibn Abi Shayba 1427/2006: 2: 196, no. 1726]。クーファの法学者にして伝承家イブラーヒーム・アン＝ナハイーは、大きなネズミや猫が井戸に落ちた場合、40ダルウを汲み出さなければならないと説いた [Ibn Abi Shayba 1427/2006: 2: 196, no. 1725]。クーファの法学者ハンマード・ブン・アビー・スライマーン（120/738-9没）は、鶏や犬や猫が井戸に落ちて死んだ場合、30ないし40ダルウを汲み出さなければならないと説いている [Ibn Abi Shayba 1427/2006: 2: 197, no. 1729]。シャイバーニーも次のように述べている。

ネズミや雀が井戸に落ちた場合は 20 ないし 30 ダルウを汲み出さなければならない。鶏や猫が落ちてすぐに引き上げられた場合は、40 ないし 50 ダルウを汲み出さなければならない [Shaybani 1410/1990: 1: 53-54.]。

これらの学説の趣旨は次のとおりであろう。一定量の水を井戸から汲み出すことにより、地下から清浄な水が供給されるので、不浄物に触れた井戸の中の水が充分に希釈され、全体として清浄とみなされる。たとえば、井戸に少量の水があつてそこに猫が落ちた場合、猫を引き上げ 40 ダルウの水を汲み出すことにより水が清浄になるとするならば、地下から供給された 40 ダルウの清浄な水は、猫から出た（と推定される）不浄物によって不浄にならないだけの充分な量に当たると解される。逆に言えば、この場合に、30 ダルウを汲み出したならば、たとえ井戸の水が一見清浄に見えても、不浄水として扱われることになる。

ここで、先に、2 クツラが 6 キログラムに等しいとする説があると述べたことを思い出そう。この説を、上掲のアブー・フライラの言葉「40 クツラの水があれば、それは汚れを含まない」に当てはめてみると、この言葉は、120 キログラムの水があれば、その水は汚れを含まない、すなわち浄水として扱われるという趣旨になる。シャーフイー派やハンバル派は、そのような水の量を約 196 キログラムとしていた。120 と 196 ではかなり差があるとも言えるが、その趣旨は同じであり、その指示する規定に着目する限りは、預言者の言葉「2 クツラの水があれば、それは汚れを含まない」は、クツラを再定義した（数十倍大きな量とした）上で、このアブー・フライラの言葉に含まれる規定を表現していると見ることができ

Ⅲ ハディース [1]

前節の結論を言い換えると、預言者の言葉「2 クツラの水があれば、それは汚れを含まない」における「2 クツラ」は元々比較的少量の水を指したが、後には大きい量として読み替えられた。これにより、この言葉は、水が 2 クツラあれば、不浄物に触れても不浄にならないという規定を表現するようになった。すると、この言葉は元々どのような規定を表現していたのかという疑問が生ずる。この疑問に答えるために最初に行うべき作業は、この言葉を含むハディースを調べることである。この言葉のみからなるハディースを除くと、そのようなハディースのすべてが、アブドッラー・ブン・アブドッラー・ブン・ウマル（メディナ、105/723-4 没）またはウバイドッラー・ブン・アブドッラー・ブン・ウマル（メディナ、106/724-5 以降没）←イブン・ウマル（73/692-3 没）という伝達履歴を共有している。イブン・ウマルは、第 2 代正統カリフ、ウマルの子で、メディナで流布していたハディースのなかで最も多くのハディースの発信者である。アブドッラーとウバイドッラーはイブン・ウマルの子である。

以下ではこのハディース群をハディース [1] と呼ぶことにする。ハディース [1] は、内

容の上から3つのハディース群に分類することができる(ハディース [1.1], ハディース [1.2], ハディース [1.3])。以下, それぞれについて考察を加える。

1 ハディース [1.1]

最初に取り上げるハディース [1.1] は, 上掲の預言者の言葉のみからなるハディースからなる。これらのハディースの伝達履歴において, イブン・ウマルの後の口伝者は, アースィム・ブン・アル=ムンズィル(メディナ)←ウバイドゥラー・ブン・アブドゥラー・ブン・ウマル(ハディース [1.1a]) または, ワリード・ブン・カスィール←ムハンマド・ブン・アッバード(メッカ)←アブドゥラー・ブン・アブドゥラー・ブン・ウマル(ハディース [1.1b]), またはアブー・バクル・ブン・ウマル(メディナ)←ウバイドゥラー・ブン・アブドゥラー・ブン・ウマル(ハディース [1.1c]) の3つである。

ハディース [1.1] はこの言葉を預言者に帰せしめているが, アブー・ダーウードによれば, ハンマード・ブン・ザイド(バスラの伝承家, 167/784没)はこれをアースィム・ブン・アル=ムンズィル自身の言葉だとしていた [Abū Dāwūd n.d. 1: 17, no. 65]。アースィムの生没年は不明であるが, アブドゥラー・ブン・アッ=ズバイル(メッカ, 73/692-3年没)からハディースを聞き, またヒシャーム・ブン・ウルワ(メディナ, 145/762-3没)にハディースを伝えたとされる [Ibn Hibbān 1393/1973: 7: 256; Ibn Hajar al-'Asqalāni 1412/1991: 3: 41-42, no. 3467]。したがって, おおよそ100/718-9年前後に死亡したと推定される。同じ言葉は, ムジャーヒド・ブン・ジャブル(メッカ, 21-104/641-723)にも帰せられている [Ibn Abī Shayba 1427/2006: 2: 141, no. 1541; Ibn al-Ja'd 1405/1985: 311, no. 2110]。また, サイード・ブン・ジュバイル(クーファの教友, 95/714没)も, 「静水が3クツラに達する場合, 何もこれを不浄にしない」と述べたと伝えられる [Ibn Abī Shayba 1427/2006: 2: 140, no. 1540]。したがって, この言葉またはそれに似た言葉が預言者以降の学者によって語られていて, それが後に預言者の言葉とされた可能性がある。ただここでは, 本稿の目的に鑑みて, この点ではなく, この言葉が単独で100/718-9年頃にはすでに流布していたことに注意しておこう。

2 ハディース [1.2]

ハディース [1.2] に含まれるハディースの一つによれば, イブン・ウマルは次のように語っている。「神の使徒は, 駄獣や野獣が訪れる水場について尋ねられて, 『水が2クツラある場合, 水は穢れを含まない』と言った」 [Abū Dāwūd n.d.: 1: 17]。これと同じまたは実質的に同じ内容を含むハディースのなかには, アブドゥラーまたはウバイドゥラーの直後の伝達履歴が, ムハンマド・ブン・イスハーク(85-151/703-769)←ムハンマド・ブン・ジャアファル・ブン・アッ=ズバイル(メディナ, 110年代/728と738の間没)となっているものと, ワリード・ブン・カスィール(151/768-9没)←ムハンマド・ブン・ジャアファルと

なっているものがある。他方、ムハンマド・ブン・ジャアファルにより伝えられるハディースのなかには、預言者の「水が2クツラある場合、水は穢れを含まない」という言葉のみからなるものはない。

これらの口伝者のなかで、ムハンマド・ブン・ジャアファルは、メディナの法学者であり、アーイシャ（58/678 没）からもハディースを伝えている。ムハンマド・ブン・イスハークは、メディナ生まれで、若くしてイラクに移住し、クーファやバグダードなどでハディースや預言者伝を伝えた [Ibn Sa'd 1421/2001: 7: 552-553, no. 2151]。ワリード・ブン・カスィールもメディナ生まれで、後クーファに移住した。その師にはメディナの伝承家あるいは法学者が多いが、弟子の多くはイラクの伝承家である [Ibn Hajar al-'Asqalāni 1412/1991 6: 95-96, no. 8616]。

先に述べたように、ムハンマド・ブン・ジャアファルは預言者の言葉のみからなるハディースの伝達履歴のなかには含まれていないので、一見すると、彼がムハンマド・ブン・イスハークやワリード・ブン・カスィールに伝えたハディースはハディース [1.2] の文言と同一だったと思われるかもしれない。しかし、不浄物に触れた水をめぐるメディナの学説を勘案すると、この可能性は低いように思われる。

すなわち、すでに述べたように、イブン・ルシュド・アル=ジャッドによれば、エジプトで活動したマーリクの弟子たちは、不浄物に触れた水の法的性質を論ずる際に、水の量が多いか少ないかで区別を設けている。これにたいして、メディナの弟子たちはかかる区別を設けず、水が一見して変質していなければこれを清浄とみなすとしていた [Ibn Rushd al-Jadd 1404-06/1984-86: 1: 86; cf. Saḥnūn n.d.: 1: 25-26]。しかるに、メディナの弟子たちの説は、メディナの伝統的な学説と一致していた。というのは、サハヌーンは、カースィム・ブン・ムハンマド（105/723-4 年没）とサーリム・ブン・アブドッラー（106/724-5 没）は、静水に動物が落ちて死んだ場合について問われて、一見して死体が「それを汚染していない (lā yudannisu-hu)」と判断されるならば、これを飲用に用いても差し支えないと答えたことと記しているからである [Saḥnūn n.d.: 1: 25]。カースィムは「メディナの七法学者」の一人とされ、ある説によればサーリムもまたその一人に数えられ、ともにメディナの権威ある法学者とされていた。サハヌーンはまた、ズフリーヤラビーア・ブン・アビー・アブドッラーハマー（136/742 没）といったメディナの権威ある学者も、「それ [動物がそこで死んだこと] が、味も色も匂いも変えていない限り」問題はないとしたと記している [Saḥnūn n.d.: 1: 25-26]。

もちろん、ムハンマド・ブン・ジャアファルが、メディナの通説に反して、水の量の大小によって区別を設けていたという可能性も否定はできない。しかし、そう考えるよりは、ハディース [1.2] のなかで、野獣が訪れる水飲み場について預言者が問われたという前半部分と、水が2クツラに達するならば清浄だと預言者が答えたという後半部分は、別個に伝えられ、それをムハンマド・ブン・イスハークとワリード・ブン・カスィールが結合した可能

性の方が高いように思われる。実際に、このハディースの前半部分については、同じ内容のアサル（教友や後継世代の言行を伝える伝承）やハディースが、『ムワッター』やサハヌーンの『ムダウワナ』に収録されている。すなわち、『ムワッター』に収録された伝承によれば、ヤヒヤー・ブン・アブドッラハマーン・ブン・ハーティブ（メディナ，104/722-3 没）は次のように語っている（アサル [1]）。

ウマル・ブン・アル=ハッターブは、ある時、アムル・ブン・アル=アースを含む仲間たちとともに馬で出かけた。彼らが水飲み場に着いた時、アムルはその所有者に「水飲み場の主よ、野獣（sibā）があなたの水飲み場を訪れることがあるか」と尋ねた。するとウマル・ブン・アル=ハッターブは「水飲み場の主よ、答えなくてよい。我々は野獣の後に訪れるし、野獣も我々の後に訪れるのだから」と言った [Malik 1403/1983: 40, no. 11]。

『ムダウワナ』に収録されたハディース（伝達履歴：イブン・ワハブ←イブン・ジュライジュ）によれば、イブン・ジュライジュは次のように語っている。

神の使徒は、アブー・バクルとウマルとともに、ある水飲み場に着いた。するとその所有者たちがやってきて、「神の使徒よ、犬や野獣がこの水飲み場から飲んでいきます」と言った。すると彼は「動物たちが飲んだものは彼らに属する。我々には、その残り水が飲むことのできる清浄な水として残されている」と言った [Saḥnūn n.d.: 1: 6]。

また、『ムダウワナ』には、むしろアサル [1] に近い文言のハディースが、アブドッラハマーン・ブン・ザイド（メディナ，182/798-9 没）←ザイド・ブン・アスラム（メディナ，136/754 没）←アター・ブン・ヤサール（メディナ，アレクサンドリア，103/721-2 没）という伝達履歴を付して収録されている [Saḥnūn n.d.: 1: 6]。したがって、ハディース [1.2] の前半部分は、これらのハディースの異本の一つだったと見ることができる。

ハディース [1.2] の後半部分については、すでに述べたように、ムハンマド・ブン・ジャアファルと同時代人と思われるアースィムやムジャーヒドやサイード・ブン・ジュバイルがこれと同じまたは似た言葉を伝えており、ムハンマド・ブン・ジャアファルがムハンマド・ブン・イスハークやワリード・ブン・カシールに伝えたハディースにこの後半部分と同じまたは似た文言が含まれていたと考えて間違いあるまい。同様に、前半部分もまたムハンマド・ブン・ジャアファルが伝えたと考えてよい。しかし、メディナの支配的な学説に鑑みて、この2つの部分を結び付けたのは、彼自身ではなく、ムハンマド・ブン・イスハークとワリード・ブン・カシールがこの2つの部分を結合したと考えるのが適当である。

3 ハディース [1.3]

ハディース群 [1.3] は、ハンマード・ブン・サラマ（バスラ，167/784 没）←アースィム・ブン・アル=ムンズィル←ウバイドッラー・ブン・アブドッラー・ブン・ウマル←イブン・ウマルという伝達履歴を共有するハディースから構成される。その一つによれば、アー

スイムは次のように語った。

我々は、我々とウバイドッラー・ブン・アブドッラー・ブン・ウマルに属する果樹園にいた。礼拝の時刻になったので、ウバイドッラーが果樹園の中の水溜りに行って、そこで部分洗淨を始めた。しかし、その水溜りには死んだラクダの皮があった。そこで私は「この皮があるというのに、私はここで部分洗淨を行ってよいものでしょうか」と言った。すると彼は、「私の父は、神の使徒が『水が2クッラになるならば、それは不浄にならない』と語った」と言った [Dāraqūṭni 1403/1982: 1: 23, no. 21]。

このハディースでは、水溜りが、動物がそこから飲んだことではなく、そこに不浄物が落ちていたことが問題になっている。しかしここでも、ハディース [1.2] と同じような現象が起こっているので、以下に説明しよう。すでに述べたように、ハディース [1.1a] は、アースィム・ブン・アル=ムンズィル←ウバイドッラー・ブン・アブドッラー・ブン・ウマル←イブン・ウマルという伝達履歴を有し、この点ではハディース [1.3] と共通する。ところで、ハディース [1.3] に含まれるハディースのすべてが、ハンマード・ブン・サラマを伝達履歴に含んでいる。逆に、ハディース [1.1a] に含まれるハディースの大部分が、ハンマード←アースィム←ウバイドッラーという伝達履歴を有している。ところで、アースィムは、ムハンマド・ブン・ジャアファルと同じく、メディナで活動し、かつウバイドッラーの直後の口伝者である。よって、ハディース [1.2] に関して展開した議論——すなわち、彼の時代のメディナの通説は、水が清浄な外見を呈していればこれを清浄なものとして扱っていた——に従えば、アースィムが、水の量の大小を区別してその清浄・不浄を論じていたとは考えにくい。むしろ、ハンマード・ブン・サラマがイラクで流布していたハディースないしアサルを預言者の言葉と結合することによりハディース [1.3] を創った可能性が高い。すなわち、ハンマード・ブン・サラマの時代までにイラクで流布していたと思われる、ハディース [1.3] と同様の趣旨のハディースとして2つを挙げることができる。

(1) イブン・マージヤが収録しているハディース (伝達履歴: アハマド・ブン・スィナーン [ワースィト, 256/869-70 没]←ヤズィード・ブン・ハールーン [ワースィト, 206/822 没]←シャリーク・ブン・アブドッラー [クーファ, 176/792-3 没]←タリーフ・ブン・シハーブ [バスラ, 83/702-3 没]←アブー・ナドラ [バスラ, 100/728-9 以降没]) によれば、ジャービル・ブン・アブドッラーは次のように語った。ジャービルたちは、ある池に到ったが、そこにはロバの死体が沈んでいたため、その水を飲むのを躊躇していた。すると預言者が到着して、「水は何もこれを不浄にしない」と言ったため、ジャービルたちはその水を飲んだ [Ibn Māja n. d.: 1: 173, no. 520]。

(2) イブン・アビー・シャイバが収録しているハディース (伝達履歴: イブン・ウライヤ [クーファ, バスラ, 193/808-9 没]←アウフ・アル=アアラービー [バスラ, 146/763-4 没]) も似たような内容であるが、このハディースは2点において注目に値する。一つは、このハディースが、「イブン・アル=アシュアスの反乱の前に」開かれた会合においてある老人が

語った内容だという点である。アブドッラフマーン・ブン・アル=アシュアスは、80年から85年(699年から705年)にかけてウマイヤ朝に対して反乱を起こしている。もう一つは、預言者が「水を与え、また水を飲め。水は許されており禁じられていないからだ (inna al-mā' yahullu wa-lā yahrumu)」と言っているという点である。この預言者の言葉はこのハディースにだけ見られ、このハディースがかなり早い時期に流布していたことを示唆している。

ここからは想像になるが、ハンマード・ブン・サラマもこれらのハディースの異本を聞き及んでいて、それと彼がアースィムから聞いた預言者の言葉を結合することにより、ハディース [1.3] を創作したのではなかろうか。ハンマード・ブン・サラマは167/784年に没しており、ムスリム・ブン・ハーリド(179/795-6没)とほぼ同時代人である。したがって、多量の水は不浄物と接触しても不浄にならないという学説を受け入れていた可能性があるからである。

4 小括

以上の議論を本稿の目的に関わる部分に絞ってまとめておこう。1. で述べたように、預言者の言葉「2クッラの水があれば、それは汚れを含まない」は、100/718-9年頃にはすでに流布していた。他方、この言葉を含むハディース [1.2] は、ムハンマド・ブン・イスハーク(85-151/703-769)とワリード・ブン・カスィール(151/768-9没)がこの言葉を、動物が訪れる水飲み場に関わる別のハディースと結合することにより成立した。ハディース [1.3] も、ハンマード・ブン・サラマ(167/784没)がこれを、不浄物が投げ込まれた池に関わる別のハディースと結合することにより成立した。すなわち、この預言者の言葉は元々、動物が飲んだ水や不浄物と接触した水に関わるものではなかったと思われる。

IV ハディース [2]

それでは、この預言者の言葉は——それが真に預言者に由来するにせよ後に創作されたにせよ——元々どのような文脈の中で語られた(と解されていた)のであろうか。この問いに答えることは容易ではないが、唯一の手掛かりとして、イエメンの伝承家アブドッラッザーク・アッ=サンアーニー(126-211/743-827)が「2クッラは1ファラクに等しい」と語ったという記述を挙げることができる [Ṣan'ānī 1403/1983: 1: 79, no. 259]。もとよりこのサンアーニーの説明が当時一般に受け容れられていたかどうか、また預言者の言葉の解釈として正しいかどうかとも分からない。しかしこの説明以外にこの点に関して——後世の法学者の議論を除けば——2クッラの大きさに関する情報を見出すことができなかったため、以下では1ファラクという数値を含むハディース群 [2] を考察することにしよう。

ハディース群 [2] には大きく分けて2つの異本がある。その一方(ハディース [2a])に

よれば、預言者の妻アイシャは、「私と神の使徒は、その量が1ファラクの一つの容器を用いて全身洗淨を行っていた」と語ったとされる [Šan'āni 1403/1983: 1: 267-268, no. 1027; Ibn Ḥanbal 1416/1995: 18: 18, no. 25510; Nasā'i 1411/1991: 1: 116, no. 235; Bayhaqī n.d.: 1: 193, no. 881]。これにたいして、他方の異本 (ハディース [2b]) によれば、預言者の妻アイシャは、「神の使徒は、1ファラクの杯 (qidh) を用いて全身洗淨を行っていた。私と彼は、一つの容器 (inā) を用いて全身洗淨を行っていた」と語ったとされる [Muslim n.d.: 1: 255, no. 41 (319); Ibn Abī Shayba 1427/2006: 1: 356, no. 371; Ibn Rāhawayh 1412/1991: 2: 292, no. 557]。この2つの異本に含まれるハディースはすべて、〈ズフリー←ウルワ・ブン・アッズバイル〉という伝達履歴の部分を共有しているので、起源を同じくすると思われる。しかし、この2つの異本が規範的な意味を有する (つまり何らかの法規定を表現している) と考えると次のような疑問が生ずる。

すなわち、ハディース [2a] によれば、預言者と妻アイシャは2人で1ファラクの水を用いている。しかしハディース [2b] では、預言者は一人で1ファラクの水を用いている。しかるに、大汚の状態にある者が全身洗淨を行うために必要な水の最小量は1サーウであるとされ、この点については法学説の上では異論がない [Ibn Qudāma 1406/1986: 1: 293-294; cf. Kāsānī 1402/1982: 1: 35; Ibn Rushd al-Jadd 1404-06/1984-86: 1: 52; Nawawī 1405/1985: 1: 90]。1ファラクは3サーウに等しいので、この2つのハディースの内容は矛盾している上に、用いられた水の量も多過ぎる。この2つのハディースあるいはその一方は、スンナ派四法学派の学説とは異なる前提に基づいているのではないだろうかという疑問が生ずる所以である。さらに、ハディース [2b] も、預言者が独りで洗淨を行う際に用いていた「杯」の容量は1ファラクとされているが、アイシャとともに用いていた「容器」の容量は記されていない。なぜこのような曖昧な文言が用いられているのだろうか。

これらの疑問に答える前に、まず、この2つのハディースに対するマリック派の法学者イブン・ルシュド・アル=ジャッドの説明を見ておこう。彼は、1ファラクは3サーウに等しく、また1サーウは4ないし5ムッドに等しいという前提に立って、次のような解釈に言及している。すなわち、ハディース [2a] においては、容器は満杯ではなく、2サーウと2ムッドの水が入っていて、最初に預言者とアイシャがそれぞれ1ムッドを用いて部分洗淨を行い、その後にそれぞれが1サーウを用いて全身洗淨を行った。ハディース [2b] においては、容器は満杯であったが、預言者は1サーウだけを用いて全身洗淨を行った [Ibn Rushd al-Jadd 1404-06/1984-86: 1: 201]。

いかにも牽強付会の感を与える説明であるが、ハディース [2a] は示唆的である。というのは、スンナ派四法学派の通説は、大汚の状態にある者が全身洗淨に用いた残り水は清浄であり、これを他の者が洗淨に用いることができるとしているからである [Maghen 1999: 363, 390]。イブン・アッバースは、「預言者の妻の一人が大汚を清めるために全身洗淨を行った。それから預言者がその残り水で部分洗淨を行おうとした時、彼女はそのことを告げ

た。すると彼は『水は何もこれを不浄にしない』と言った」と語ったと伝えられる [Ibn Hanbal 1416/1995: 1: 235, no. 2102] (ハディース [3])。この規定を額面通りにとれば、たとえばある者が全身洗淨を行った場合、洗淨に用いた水の量が (洗淨の最中に水が若干減少することを勘案するとして) 1 サーウ強あれば、その残り水を用いて他の者が全身洗淨を行うことができるはずである。

しかし、イブン・ルシュドは、大汚の状態にある者が洗淨に用いた水は穢れるとする説、あるいはその者が男ならば穢れるが女ならば穢れないとする説、逆に女ならば穢れるが男ならば穢れないとする説が存在すると述べている [Ḥaṭṭāb 1416/1995: 1: 72]。あるハディースによれば、預言者も、女性が洗淨に用いた残り水を用いて男性が洗淨することを禁止したとされる [Tirmidhī n.d.: 1: 93, no. 64]。同様の説はイブン・ウマルにも帰せられている [Mālik 1418/1998: 1: 58, no. 412]。これらの学説によれば、大汚の状態にある者が用いた水の量の多寡にかかわらず、その残り水を洗淨に用いることはできないはずである。

しかしハディース [2a] は、今挙げた2つの学説のいずれにもなじまない。私見によれば、このハディースは次のように解されるべきである。すなわち、大汚の状態にある者が洗淨に用いた水は、それが少量ならば穢されるが、ある一定の量を超えるならば大汚の状態にある者の汚れを十分に希釈し、それを別の者が洗淨に用いることができるという意味において清浄である。そしてその最小量が1 ファラクに相当する。観念的には、1 ファラクの水がそれぞれ1 サーウの容量を持つ3つの部分に分割され、最初にこれを用いた者により最初の1 サーウが穢されるが、第2の1 サーウの部分は清浄のままなので洗淨に用いることができる。第3の1 サーウの部分は、最初の者による洗淨の際に幾ばくかの水が失われるので、その損失分を見込んだものである。

このように考えると、ハディース [2b] は、四法学派の通説を前提として、次のような趣旨に基づいて成立したと考えられる。すなわち、ハディース [2a] が、1 ファラクの水が洗淨に用いられたという部分と、預言者とアーイシャが同じ容器の水を用いたという部分に分解された。後半の部分 (ハディース [2b] の第2文) は、大汚の状態にある者が洗淨に用いた水は清浄であるという学説を表現している。これにたいして前半は、単に歴史的な事実として預言者が (全身洗淨に用いるにしても多過ぎるが) 1 ファラクの水を用いたと述べている。

上述のように、サンアーニーは、2 クツラは1 ファラクに等しいと説いている。しかしそれ以外にこの2つが等しいとする記述を見つけることはできなかった。したがって、「2 クツラの水があれば、それは汚れを含まない」という預言者の言葉を大汚の状態にある者が洗淨に用いる水の量に結び付けるのに十分な証拠があるとは言えない。しかし、本節ではこれを結論とする。この結論を前提として、学説の上では、大汚の状態にある者が洗淨に用いた水はその量の大小にかかわらず穢れることはないとする見解が通説の立場を獲得するにつれて、この預言者の言葉が、一旦は元々の文脈を離れて単独で流布するようになったと考える。

ま と め

以上の議論を総合して、洗淨に用いられる水に関する学説とハディースの展開を要約しておこう。預言者が「水が2クツラある場合、何もこれを不浄にしない」と言ったという内容のハディースは、元々は、大汚の状態を清浄にするための洗淨の残り水の量に関するものであった。しかし、そのような残り水は、その量の大小にかかわらず、これを洗淨に用いることができるとする説が通説になるにつれ、この言葉はその文脈から切り離され、単独で流布するようになった。その後、このハディースは、野獣や犬がそこから飲んだ水や不浄物に触れた水に転用されるようになった。すなわち、ムハンマド・ブン・イスハークとワリード・ブン・カスィール（ともにメディナで生まれ、後にイラクに移住した）は、この預言者の言葉と、メディナで流布していた、野獣や犬がそこから飲んだ水飲み場の水を預言者が清浄だと言ったとする内容のハディースを結合して、ハディース [1.2] を創った。バスラの伝承家ハンマード・ブン・サラマは、この預言者の言葉と、バスラで流布していた、預言者がラクダの皮が沈んでいる池の水を飲むことができると言ったというハディースを結合して、ハディース [1.3] を創った。この2つのハディースが創られる過程で、クツラは、元々の量の10倍以上の量として再定義された。その再定義の根拠とされたのは、動物が静水に落ちた場合に数十杯の水を汲み上げなければならないとするクーファやメッカの学説であった。

[追記] 本稿の執筆にあたっては、科学研究費助成（基盤研究(C)「シャーフイー派法学の展開と東アフリカへの移植」課題番号16K03258）を受けている。記して御礼を申し上げる。

参考文献

- Abū Dāwūd Sulaymān b. al-Ash'ath al-Sijistānī (n.d.) *Sunan Abī Dāwūd*, ed. Muḥammad Muḥyi al-Dīn 'Abd al-Majīd. 4 vols. Beirut.
- Bayhaqī, Abū Bakr Aḥmad b. al-Ḥusayn b. 'Alī al- (n.d.) *al-Sunan al-kubrā*, 10 vols. Beirut.
- Dāraquṭnī, Abū al-Ḥasan 'Alī b. 'Umar b. Aḥmad b. Mahdī b. Mas'ūd b. al-Nu'mān b. Dīnār b. 'Abd Allāh al- (1403/1982) *Sunan al-Dāraquṭnī*, 4 vols. Beirut.
- Ḥaṭṭāb=Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Abd al-Raḥmān al-Maghribī al-ma'rūf bi'l-Ḥaṭṭāb al-Ru'aynī (1416/1995) *Mawāhib al-Jalīl li-sharḥ Mukhtaṣar Khalīl*, ed. Zakariyyā' 'Umayrāt, 8 vols. Beirut.
- Ibn Abī Shayba, Abū Bakr 'Abd Allāh b. Muḥammad (1427/2006) *al-Muṣannaḥ*, ed. Muḥammad 'Awwāma, 25 vols. Jedda and Beirut.
- Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, Shihāb al-Dīn Abū al-Faḍl Aḥmad (1412/1991) *Tahdhīb al-tahdhīb*, 6 vols. Beirut.
- Ibn Ḥanbal, Aḥmad b. Muḥammad (1416/1995) *al-Musnad*, ed. Aḥmad b. Muḥammad Shākir, 20 vols.

- Cairo.
- Ibn Hibbān b. Aḥmad Abū Ḥatīm al-Taymī al-Bustī, Muḥammad (1393/1973) *Kitāb al-thiqāt*, ed. Muḥammad 'Abd al-Mu'īd Khān, 9 vols. Hayderabad.
- Ibn al-Ja'd b. 'Ubayd al-Jawharī, Abū al-Ḥasan 'Alī (1405/1985) *Musnad Ibn al-Ja'd*, ed. 'Abd al-Mahdī b. 'Abd al-Qādir b. 'Abd al-Hādī, 2 vols. Kuwait.
- Ibn Māja, Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Yazīd al-Qazwīnī (n.d.) *Sunan al-Ḥāfiẓ Abī 'Abd Allāh Muḥammad b. Yazīd al-Qazwīnī b. Māja*, ed. Muḥammad Fu'ād 'Abd al-Bāqī, 2 vols. Beirut.
- Ibn Qudāma, Muwaffaq al-Dīn Abū Muḥammad 'Abd Allāh b. Aḥmad b. Muḥammad (1405/1985) *al-Kāfi fī fiqh al-imām al-mujabbal Aḥmad b. Ḥanbal*, ed. Zuhayr al-Shāwish, 4 vols. Beirut, Damascus.
- Ibn Qudāma (1406/1986) *al-Mughnī*, eds. 'Abd Allāh b. 'Abd al-Majīd al-Turkī and 'Abd al-Fattāh Muḥammad al-Halw, 15 vols. Riyadh.
- Ibn Rāhawayh (1412/1991) =Ishāq b. Ibrāhīm b. Makhlad al-Ḥanzalī al-Marwazī, *Musnad Ishāq b. Rāhawayh*, ed. 'Abd al-Ghafūr 'Abd al-Ḥaqq Ḥusayn Burr al-Balūshī, 5 vols. Medina.
- Ibn Rushd al-Jadd, Abū al-Walīd Muḥammad b. Aḥmad (1404-06/1984-86) *al-Bayān wa-al-taḥṣīl wa-al-sharḥ wa-al-tawjīh wa-al-ta'līl fī masā'il al-Mustakhrāja*, eds. Muḥammad al-Ḥajjī et al., 18 vols. Beirut.
- Ibn Rushd al-Jadd (1408/1988) *al-Muqaddamāt al-mumahhadāt*, eds. Muḥammad Ḥajjī and Sa'īd Aḥmad A'rāb, 3 vols. Beirut.
- Ibn Sa'd b. Manī' al-Zuhrī, Muḥammad (1421/2001) *Kitāb al-ṭabaqāt al-kabīr*, ed. 'Alī Muḥammad 'Umar, 11 vols. Cairo.
- Jaṣṣās, Abū Bakr Aḥmad b. 'Alī al-Rāzī al- (1412/1992) *Aḥkām al-Qur'ān*, ed. Muḥammad al-Ṣādiq al-Qamḥāwī, 5 vols. Beirut.
- Juwaynī, Imām al-Ḥaramayn Abū al-Ma'ālī 'Abd al-Malik b. 'Abd Allāh b. Yūsuf al- (1430/2009) *Nihāyat al-maṭlab fī dirāyat al-madhhab*, ed. 'Abd al-'Azīm Maḥmūd al-Dīb, 1+20 vols. Jeddah.
- Kalwadhānī, Abū al-Khaṭṭāb b. Maḥfūz b. Aḥmad b. al-Ḥasan al- (1423/2002) *al-Hidāya fī furū' al-fiqh al-ḥanbalī*, ed. Muḥammad Ḥasan Muḥammad Ḥasan Ismā'il, 2 vols. Beirut.
- Kāsānī, 'Alā' al-Dīn Abū Bakr b. Mas'ūd al- (1402/1982) *Badā'i' al-ṣanā'i' fī tartīb al-sharā'i'*, 7 vols. Beirut.
- Maghen, Z. (1999) Close Encounters : Some Preliminary Observations on the Transmission of Impurity in Early Sunnī Jurisprudence. *Islamic Law and Society* 6(3), 348-392.
- Mālik b. Anas b. Mālik b. Abī 'Āmir b. 'Amr b. al-Ḥārith (1403/1983) *Kitāb al-Muwaṭṭa'*, riwāyat Yaḥyā b. Yaḥyā al-Laythī, ed. Fārūq Sa'd. Beirut.
- Mālik b. Anas b. Mālik b. Abī 'Āmir b. 'Amr b. al-Ḥārith (1418/1998?) *al-Muwaṭṭa'*, riwāyat Abū Muṣ'ab al-Zuhrī al-Madanī, eds. Bashshār 'Awwād Ma'rūf and Maḥmūd Muḥammad Khalil. Beirut.

- Marghīnānī, Burhān al-Dīn Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Abī Bakr b. ‘Abd al-Jalīl al-Farghānī al-Rushdānī al-
(n.d.) *al-Hidāya sharḥ Bidāyat al-mubtadi’*, 4 vols. Cairo.
- Māwardī al-Baṣrī, Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Muḥammad b. Ḥabīb al- (1414/1994) *al-Ḥāwī al-kabīr fī fiqh
madhhab al-imam al-Shāfi’i*, eds. ‘Alī Muḥammad Mu‘awwiḍ and ‘Ādil Aḥmad ‘Abd al-
Mawjūd, 19 vols. Beirut.
- Muslim b. al-Ḥajjāj al-Qushayrī al-Naysābūrī, Abū al-Ḥusayn (n.d.) *Ṣaḥīḥ Muslim*, ed. Muḥammad
Fu‘ād ‘Abd al-Bāqī, 5 vols. Beirut.
- Muzanī, Abū Ibrāhīm Ismā‘īl b. Yaḥyā b. Ismā‘īl al-Miṣrī al- (1419/1998) *Mukhtaṣar al-Muzanī*, ed.
Muḥammad ‘Abd al-Qāhir Shāhīn. Beirut.
- Nasā‘ī, Abū ‘Abd al-Raḥmān Aḥmad b. Shu‘ayb al- (1411/1991) *Kitāb al-sunan al-kubrā*, eds. ‘Abd
al-Ghaffār Sulaymān al-Bundārī and Sayyid Kasrawī Ḥasan, 6 vols. Beirut.
- Nawawī, Muḥyī al-Dīn Abū Zakariyyā’ b. Sharaf al- (1405/1985) *Rawḍat al-tālibīn wa-‘umdat al-
muftīn*, ed. Zuhayr al-Shāwīsh, 12 vols. Beirut.
- Rāfi‘ī, ‘Abd al-Karīm b. Muḥammad b. ‘Abd al-Karīm b. al-Faḍl b. al-Ḥasan al-Qazwīnī Abū al-Qāsim
al- (1428/2007) *Sharḥ Musnad al-Shāfi’i*, ed. Abū Bakr Wā‘il Muḥammad Bakr Zahrān, 4
vols. Qatar.
- Saḥnūn b. Sa‘īd, Abū Sa‘īd ‘Abd al-Salām b. Sa‘īd b. Ḥabīb b. Ḥassān b. Hilāl b. Bakkār b. Rabī‘a al-
Tanūkhī (n.d.) *al-Mudawwana al-kubrā*, 6 vols. Beirut.
- San‘ānī al-Yamanī al-Ḥīmyarī, Abū Bakr ‘Abd al-Razzāq b. Hammām b. Nāfi‘ al- (1403/1983) *al-
Muṣannaf*, ed. Ḥabīb al-Raḥmān al-A‘zamī, 11 vols. Beirut.
- Shāfi‘ī, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Idrīs al- (1393/1973) *al-Umm*, ed. Muḥammad Zuhri al-Najjār,
8 vols. Beirut.
- Shaybānī, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. al-Ḥasan al- (1410/1990) *Kitāb al-aṣl al-mā rūf bi-l-
Mabsūt*, ed. Abū al-Wafā’ al-Afghānī, 5 vols. Beirut.
- Tirmidhī, Abū ‘Īsā Muḥammad b. ‘Īsā b. Sawra al- (n.d.) *al-Jāmi‘ al-ṣaḥīḥ, wa-huwa Sunan al-
Tirmidhī*, ed. Ibrāhīm ‘Aṭwah ‘Awḍ, 5 vols. Cairo.
- 中田考 (2003) 『イスラーム法の存立構造』 ナカニシヤ出版.

(東京大学大学院人文社会系研究科)